

平成26年度第2回宮崎県立図書館協議会議事録

期 日	平成27年3月13日（金）午後1時30分から午後3時30分まで	
場 所	宮崎県立図書館2階研修室	
出席者	委員	議長：根岸裕孝委員 委員：川邊英樹委員（副議長）、足立泰二委員、江田正和委員、 緒方哲委員、志野崎陽子委員、宮田香子委員、 中西礼子委員、中川美香委員、山崎知佳委員 計10名
	オブザーバー	小林市立図書館 山下町子館長
	図書館職員	伊藤名誉館長、内戸保館長、野邊副館長 坂本総務・企画課長、上谷情報提供課長 日高総務担当副主幹、石倉普及支援担当主幹、橘蘭情報総括担当 副主幹、靱木郷土情報担当主幹、中馬情報提供担当主幹
	生涯学習課	長尾社会・家庭教育担当副主幹、清家主査
	傍聴者	なし
会 議 内 容	1 開 会 2 館長あいさつ 3 出席者紹介 4 日程説明 5 議 事 (1) 報告事項 ① 平成26年度の課題への対応状況及び新たな取組について ② 伊藤名誉館長の活動状況について 6 閉 会	
記録	総務・企画課	

1 平成26年度の課題への対応状況及び新たな取組について  
事務局からの説明後、次のとおり発言があった。

(1) 市町村立図書館からの意見

日本一の読書県を目指した環境整備は、まさに県立図書館の市町村立図書館への支援や図書館の図書館としての役割であり、大変期待をしている。

先ず、平成26年度の課題への対応状況について、1点目は、システムの更新であるが、使いやすく、見やすくなっており、レファレンス対応も速くできるようになり、市民サービスの向上につながっている。

2点目は、次世代につなぐみやざきの言の葉継承事業であるが、小林市立図書館野尻分館が次年度の開催予定地となるが、事業の効果に寄与したい。

3点目は、増加する資料に対する蔵書スペースの問題であるが、小林市でも雑誌の除籍を図ったことがある。市町村立図書館も資料の分担保存の役割の一部を担う時期に来たのかと考えた。

次に、平成27年度新規事業についてであるが、市町村としては大きな期待を持っている。

県内の全図書館を巻き込んで、全国のモデルとなる事業を推進していただきたい。特に司書の育成は重要だと思うが、人を育てるということは単独館では難しいので、県として力を入れていただきたい。また、県立図書館の資料を整備・充実させることは、市町村立図書館に大きな影響を与えると考える。予算を復活させた皆さんの御尽力に感謝する。今日の図書館が置かれている状況は、個々の図書館では利用者の要求を満たすことができないことも多いので、県立図書館を中心に県内の全ての図書館が連携して取り組む必要があると思う。市町村立図書館も頑張りたい。

(2) 協議会委員の意見交換  
(委員)

第1回の協議会で出した意見を採り上げ、レファレンスや物流の充実を図っていただくことに感謝する。また、図書館システムも検索機能を充実していただいた。物流の問題は、広大な面積の宮崎県では、移動コストが個人にとって大きな負担となるが、宮崎県に住もうとしている人が情報難民とならないように物流システムの構築に期待している。

図書館の資料が整備されても有効活用されなければ意味がないので、図書館自体についてのプレゼンテーションや情報発信が重要だと思う。また、県立図書館に来ない人でもわかるように、レファレンスについて市町村に対する広報を工夫してもらいたい。

また、図書館の仕事は、書架の整理など見えない労力も多いので、それを可視化する試みをしてはどうか。また、書籍のパッケージ技術についても、一般の人向けにワークショップをすると本を大切にすることなど、図書館への理解が広がるのではないか。

一つ質問があるが、ボランティアを受け入れるのに障害となっていることがあれば、教えてもらいたい。また、実際に受入可能と考えている分野はあるのか。

⇒（図書館からの回答）

多岐にわたるボランティアの分野のうちどの活動が本館で使えるかについては、難しい面もある。これまで読み聞かせボランティアを養成して、児童室で定期的に活動してもらっている。何が障害になるのかについて具体的な検討はしていないが、どのような体制で仕事を割り振るのか、どのようにスキルを付与するのかなど、他県の事例を研究しながら対応を検討する必要がある。新しい分野については、今から検討しなければならない。

（委員）

ボランティアに場の開放をするのではなく、管理監督上の問題があるということか。

⇒（図書館からの回答）

読み聞かせでは、意見交換などを行いながら、ボランティアの自主性に任せているが、他県の例では、組織的な対応をしているところもあるので、どちらのやり方が良いのかも考えたい。

（委員）

1点目は、県立図書館の役割について、県民の啓発が進んだと思うが、知事とのふれあいフォーラムやみやぎ読書フォーラムで私自身も勉強になったし、宮日新聞等の報道によるところも大きかったと思う。県民に対するアピールのしかたについていろいろと考える機会になった。

2点目は、県立図書館は、市町村立図書館のモデルとして模範的かつ先駆的な事業を行ってきているが、アンケート調査の結果にもあるように、県立図書館に遠方から来る人は少ないと思われる。県全体のレベルを上げるために、市町村立図書館からの要望としては、小規模図書室の充実のための職員研修は有難いので続けてもらいたい。

また、やまびこの他に現地で図書館の運営や設営を見ていただいて、アドバイスを直接実施して、専門家でない職員の資質を高めてほしいと考える。

（委員）

僻地の小学校に勤務したことがあるが、蔵書数の少ない図書室にとってやまびこの運行は大変助かっているので、さらに充実してもらいたい。単に本を借りることができるだけでなく、やまびこに乗っている図書館職員との交流がある。そのときに、図書に関する話や他校の取組に関する情報も教えていただくと有難い。

また、先ほど、小林市立図書館からの意見にもあったが、学校図書室も資料のスペースがなくなって廃棄することがある。その基準は曖昧なので、学校職

員に除籍のしかた等についての指導があると、子どもの利用促進にもつながり有難い。

(委員)

1点目は、図書館の機能は多岐にわたるが、ボランティアの活用についても、その機能を助長するように考えてもらいたい。また、図書館が行う講座などのイベントのPRの情報をウェブサイトで常時発信するなど、さらに充実してほしい。

2点目は、大阪ではまちなかライブラリーに若者が集まっている状況もあるが、他にもネットを通じた取組などを考えてもらいたい。物流システムもネットを活用して構築し、大学図書館との連携も含めて広げてもらいたい。

3点目は、以前にシェリング研究という哲学者に関する本で大学図書館になかったものを県立図書館の萩原文庫で探し当てたことがあるが、これは在職中に亡くなった司書の方の御家族が寄贈してできた文庫であった。このような司書を育てるという気運を醸成し、このような文庫があることも県民に喚起するような取組を講じてもらいたい。

(委員)

図書館は司書という人が大事であり、規模の大小に関わらず図書館の運営を司書が決めていくので、司書の重要性はその専門性にある。地域の財政上の問題はあがるが、地域が自立していくための根っこになると思うので、司書の資質向上の研修や人事異動についても知恵を拝借したい。

レファレンスということが一般には知られていないので、読書以外の目的でも図書館を幅広く活用してもらうために、レファレンスに関するワークショップなどをやってはどうかと考える。

また、既に実施されているかも知れないが、図書館で行っている緑陰コンサートなどのイベントの際にも、図書館や本の利用につなげる要素を司書を活用して取り入れるなどの工夫をしてはどうか。日本一の読書県にするのであれば、マスコミなどあらゆる機関と連携して図書館をPRし、専門家も育てる必要がある。

(委員)

県内には図書館と図書室があるが、どのくらいあるのか。

⇒ (図書館からの回答)

県公共図書館連絡協議会の構成員として、公民館図書室などが16あり、図書館は県立と分館を含めて31ある。

(委員)

宮崎県という名称の由来をレファレンスしたことがあるが、解答には行き着かなかったものの、丁寧な対応をしていただいた。行政がレファレンスをもっ

と活用することで、例えば、若年人口の流出や老年人口の流入などの実態がより深く理解でき、より深く検討できるなど、レファレンスの目指すべき姿がわかってくるかも知れない。県立図書館のレファレンス対応の体制や実績はどうなっているのか。

⇒（図書館からの回答）

レファレンスについては、県外の人から評価してもらっており、お礼状などが来ている。レファレンスに対する職員の寄り添う姿勢が評価されたものと考えている。

職員体制は、情報提供担当に一般職員が3名とリーダーが1名おり、土日当番は他の担当から4～5名程度の応援をしてもらっているが、司書資格を有する人数はその半分程度で、3～5年で人事異動がある。平成25年度のレファレンスの実績は、8,800件程度である。

レファレンスに対応する職員は、その場でわからないとは言わず、国会図書館やデータベースなども活用して必ず調べることにしている。また、聞かれたことに答えるだけでなく、より積極的なビジネス支援、子育て支援、健康情報の提供なども広い意味でレファレンスだと考えている。

（委員）

自分の経験では、大阪の中央図書館のように、レファレンスに1日司書が付き添ってくれるところもある。

（委員）

日本一の読書県のイメージはどんなものか。数値目標を定めるのかソフト的な仕上がり像があるのか。本を読むことがどのように人を支えるのかということを実感できるシンポジウムの開催等も考えているのか。

司書とは本と人をつなぐ名医に近い存在だと思うが、そのような司書を育てたり、専門職を雇用する気運づくりや応援をしてもらいたい。また、若者を自立させるために図書館のサポートなどを体験する活動を考えてもらいたい。

さらに、物流システムの課題等が見えていれば教えてもらいたい。

⇒（図書館からの回答）

日本一の読書県づくりとは、知事の政策提案の中で出ている言葉で、家庭、地域、学校が一体となった人材育成の中に位置づけられている。子どもの読書活動の推進が軸になっているのではないかと考える。

⇒（生涯学習課からの回答）

日本一の読書県のゴールのイメージは、子どもからお年寄りまで読書をする人の割合が多い県を考えている。教育委員会では、図書館だけでは難しいので、プロジェクトチームを設置するなどにより取り組んでいくこととしている。

今のところ数字にとらわれないが、例えば教育委員会が行っている宮崎の教育に関する調査において、家庭で読んだ本について話し合いをする割

合が62.5%であるとか、文科省の全国学力学習状況調査では、読書が好きな子どもの割合が小学生で76.0%で、全国6位であるとかの数字は参考となる。

⇒（図書館からの回答）

司書の育成については、職員を司書講習に派遣したり、研修をしたりしている。また、専門的な職員は長く勤務させたり、再び図書館に異動させるなどの努力をしていきたい。

物流システムの課題については、アンケート調査が終わってとりまとめ中なので、これから整理して報告したい。

（委員）

科学技術館には質問ボックスが置いてあって、回答のハガキが送ってきて感動したりするが、そのような子ども向けに形の残るアピールができるレファレンスを考えたり、スマートフォンと共生できるような仕組みを考えてはどうか。武雄市立図書館にも良いところ悪いところがあるが、民間の良いところは取り入れていく必要がある。また、図書館システムが使いやすくなったり、開館時間が長くなったりして、機能が充実している。そのような図書館の充実した機能を繰り返しPRすることで周知を徹底する必要がある。

県立図書館の今後は、文学以外のターゲットや本があまり好きでない子どももターゲットにする施策を検討する必要があると考える。

（委員）

知事とのフォーラムでも行動する図書館であってほしいと申し上げたが、この資料を見ると第1歩を踏み出し、行動する図書館になったという印象がある。

私たちの世代は活字から離れてスマートフォンに頼りがちであるが、その人たちを活字へ戻すという取組も必要で、例えば、まちなかに本を配置して活字離れの人たちを引き戻すなど考えてはどうか。

（委員）

ハード面について要望するが、図書館の北側の敷地外の舗装道路のタイルは、雨の日に滑るので、公園全体の施設に関する話し合いの機会などがあれば、そのことを申し入れてほしい。

（委員）

産業教育フェアに図書館も出展していたと思うが、どんな状況であったか。

⇒（図書館からの回答）

この7～8年は出展している。ビジネス支援関係でMDS（商圈データバンク）の紹介や読み聞かせを行っているが、結構お客さんに見に来ていただいていると聞いている。

(委員)

県立図書館のモデル的取組への期待、そのための専門的な司書の育成の大切さ、図書館がやっている良い取組に関する情報発信と共有をしっかりとっていくことなどについて意見が出た。また、日本一の読書県づくりに対してもしっかりした目標を立て、計画的に推進していくことへの希望があった。図書館から話しておきたいことはないか。

⇒ (図書館からの回答)

図書館の機能・役割についてのPRや学校との連携については、十分効果的な方法を検討し、取り組んでいきたい。

## 2 名誉館長の活動状況について

事務局からこれまでの活動状況を報告した後、名誉館長自身からの所感が述べられた。

### (1) 名誉館長の所感

日本一の読書県というのは、我々県民一人ひとりがどんな宮崎県にしたいのかという意識が大事ではないか。

武雄市立図書館が一時騒がれていたが、現在はそのマイナスの面が取り上げられるようになってきている。しかしながら、これが問題提起となって、図書館のあり方について議論されることとなった。本県では、資料費の問題を発端に様々な報道もあったが、議論できたことは良かったと思う。

また、自分は文学者であるから、文学が肩身の狭い状況にある中で、文学というものが人生の土台として位置づけられるよう努めたい。

さらに、県立図書館の役割としては、郷土資料の充実ということが大事だと思う。本県にも石井十次や若山牧水をはじめとした人材がいるが、その人たちのことは県立図書館で全てわかるようになると良い。その他にも尾崎真理子さんや高山文彦さんなどのような県外で活躍する本県出身者も多く、その方たちを顕彰する意味でも、本県に来ていただく取組もやりたい。

宮崎を一層PRするためにも、いろいろな人を呼んで、宮崎を題材にした作品を作っていただくための活動に、図書館とともに取り組んでいきたい。